



学習院大学史料館 ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.34

発行日 ● 平成29年(2017)4月1日

もくじ

ごあいさつ	1
装束とは	2
衣紋道とは	3
黄檀染御袍(夏)	4
宮家王殿下料産着	5
北白川宮永久王 同妃両殿下の料	6
山階芳麿侯爵夫人寿賀子所用桂	8
昭和大礼装束	9
喜多川平朗旧蔵大正大礼調度及装束裂等貼交屏風	10
宮廷装束意匠のボンボニエール	12



高田義男製作平安時代女房装束雛形
(日本語日本文学科より寄託)

ごあいさつ

学習院大学史料館では4月1日～5月27日に、『宮廷装束の世界』というテーマで平成29年度春季特別展を、また関連講座として5月13日(土)に、霞会館・衣紋道研究会による第82回学習院大学史料館講座「公家・女房装束の着装と解説」を開催いたします。本ミュージアム・レターをご覧頂ければ、日本の朝廷・公家社会において「装束」が大陸からいかに受容され、また適応変化してきたか、そして、その関連知識が体系化・有職化され「衣紋道」として継承されるなか、着用者の身分・職掌・年齢を可視化する装置として「装束」が階層的秩序を儀礼的にどのように表現・補完してきたか、公家装束や女房装束などに関する理解を深めて頂けることになると思います。春季特別展では明治天皇の儀礼服、北白川宮ゆかりの産着・成年式束帯・婚儀十二単、昭和大礼での奏任官用装束などを展示、関連講座では興味深い専門的解説があり、ご来館・ご参会の皆様方に楽しく優雅にお過ごし頂けることと思います。

あらためて新館長として、本展示および史料館講座開催にご尽力・ご協力いただきました関係各位に心よりお礼を申し上げます。

(平成29年度館長・坂本孝治郎)

宮廷装束の世界

雛祭りや時代劇などで目にすることも多い、華やかな女性装束の「十二単」や、男性の「衣冠束帯」、これらの祖型は古代に大陸よりもたらされ、御所や公家に関わる人々が着装したものです。江戸時代には有職故実という学問としても深められ、日本独自の発達を遂げました。

「十二単」とは通称で、正式には五衣・唐衣・裳と呼びます。十二領(枚)の衣を着るわけではなく、好み、寒暖により襲の枚数が選ばれました。「衣冠束帯」も言い習わしで、「衣冠」と「束帯」は別のものになります。このような装束の色目や文様、生地には決まりごとがあり、一目で着用者の身分を明らかにする働きをしました。

こういった宮廷装束は、明治期以降は皇室における祭祀・儀礼の装束として保存され、現在にまで継承されてきました。そこには、古代より保守されてきたもの、変化したものが巧みに組み合わせられ、さらに日本の伝統文化や国産品の保護という、皇室の大きな役割も見て取ることが出来ます。

この展覧会では、近代における皇室の御装束を中心として公家・女房装束を、絵画・工芸・史料など多様な側面から紹介・展示いたします。華やかな装束の世界を存分にお楽しみください。

(学芸員・長佐古美奈子)